

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(解答は解答用紙に書きなさい。なお、問題も解答用紙にあります。)

「私はそのまま二、三日過ぎました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのはいうまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思ったのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟するのですから、私はなお辛かったのです。どこか男らしい**キシヨウ**を具えた奥さんは、いつ私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言できません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっていると、自分で自分を認めている私には、それがまた**シナン**の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそういつてもらおうかと考えました。無論私のいない時にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、**面目**のないのに変りはありません。と云って、**拵え事**を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに極つています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝け出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

要するに私は正直な路を歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついていないものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直って、もう一步前へ踏み出そうとするには、今滑った事をぜひとも周囲の人に知られなければならない**窮境**に陥つたのです。私はあくまで滑った事を隠しましたがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ち竦みました。

五、六日経つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で妾が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生あんなに親しくしている間柄なのに、黙つて知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは**ベツタン**何にもいわないと答えました。しかし私は進んでもつと細かい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固より何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、一々Kの様子を語つて聞かせてくれました。

奥さんのいうところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたいらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口いっただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て**ビシソウ**を洩らしながら、「おめでとうございます」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐っていた私は、その話を聞いて胸が塞るような苦しさを覚えました。

苦しさを覚えました。

(四十七章)

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なつた様子を見せなかったのです。私は全くそれに気が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけでもせよ、敬服に値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙かに立派に見えました。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」という感じが私の胸

に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑している事だろうと思って、一人で顔を赧あからめました。しかし今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした。

私が進もうか止よそうかと考えて、ともかくも翌日あくるひまで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然ぞつとします。いつも東枕ひがしまくらで寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床とこを敷いたのも、何かの**インネン**かも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室へやとの仕切の襖ふすまが、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肱ひじを突いて起き上がりながら、屹きつとKの室を覗きました。洋燈ランプが暗く点ともっているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団かけぶとんは跳返はねかえされたように裾の方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向うむきに突つ伏ぶしているのです。

私はおいといつて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体からだは些ちつとも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際しきいぎわまで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈の光で見廻みまわしてみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の告白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否いなや、あたかも硝子ガラスで作つた義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちぼうだちに立ち竦すくみました。それが疾風しつぷうのごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策しまつたと思ひました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の **V** を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄ものすじく照らしました。そうして私はがたがた顫ふるえ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛なあてになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つてどんなに辛い文句つづがその中に書き列つづねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かつたと思ひました。(固もとより世間体の上だけで助かつたのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行はくしじやつこうで到底行先ゆくさきの望みがないから、自殺するとうだけなので。それから今まで私に世話になつた礼が、ごくあっさりとした文句でその後につけ加えてありました。世話ついでに死後の片付方かたつけかたも頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜よろしく詫わびをしてくれという句もありました。国元くにもとへは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんな一口ひとくちづつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもつとも痛切に感じたのは、最後に墨すみの余りで書き添えたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。

私は顫ふるえる手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆みなの眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返つて、襖ほじばしに迸はなつっている血潮を始めて見たのです。



**問八** 傍線部VI「私に取ってどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろう」とあるが、どのようなことが書いてあると思っていたのか。簡潔に述べなさい。

**問九** 傍線部VII「世間体の上だけで助かった」とあるが、では、どのようなことにおいて“助かっていない”と「私」は思っているのか、簡潔に述べなさい。

**問十** 傍線部VIII「わざとそれを皆目の眼に着くように、元の通り机の上に置きました」とあるが、なぜそのような行動をとったのか。簡潔に述べなさい。